わたしたちの市民図書館

図書館は、私たちの『知りたい』や『学びたい』といった欲求を満たしてくれます。そして、伊万里には公立の『市民図書館』があります。そこにはどのような魅力があるのか、のぞいてみましょう。

公立図書館とは

公立図書館は、県や市町村が設置する公共施設で、主に次のような事務があります。

▽図書や資料の収集・保存
▽自動車文庫などの巡回
▽読書会や鑑賞会、資料展示会などの開催・奨励

図書館の事務は専門性が高く、広範囲に及ぶため、図書館には専門資格を持つ『司書』が置かれています。

図書館には『司書』がいる

司書は、図書のスペシャリストです。本などの貸し出し・返却はもちろん、購入図書の選定や催し物の企画立案などにも携わっています。特に、その存在意義を試されるのは、レファレンスサービス（利用案内や文献調査など）。知識や経験を駆使し、利用者の要望に全力で応えます。

特　集
子どもたちに『学び』と『喜び』を
ー 市民図書館と学校図書館の『真』の連携を探る ー

●問合先　市民図書館（☎㉓４６４６）

近年、携帯電話やインターネット利用の低年齢化によって、子どもの『読書離れ』や、集中力・読解力の低下が指摘されています。この状況に、市内の小・中学校も危機感を抱き、学校図書館を学習の中心施設と位置づけ、『朝の読書』や『家読（うちどく）』など、学校・家庭・地域で子どもの読書活動に取り組んでいます。

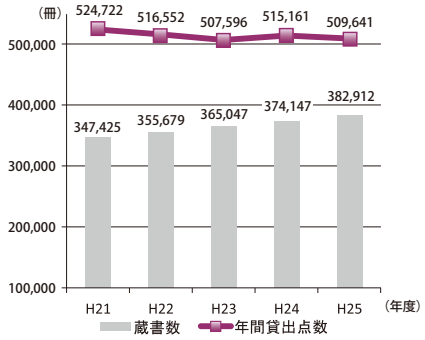
今回の特集では、地域の『知の拠点』である市民図書館が、学校図書館とどのように連携しているのかを紹介し、また、子どもたちの未来を開くために市民図書館に何ができるのか考えます。

市民の『知』の拠点

市民図書館には、哲学や歴史、文学、科学、産業など、さまざまな分野の一般書から、児童書や雑誌、郷土・行政資料に至るまで、さまざまな図書や資料が保存され、蔵書数は38万2912冊（平成26年3月末時点）にのぼります。貸出利用者数は年間で約11万人、貸出冊数は約51万冊で、市民1人あたり8・93冊を貸し出している計算になります。昨年11月には、貸出冊数が累計1000万冊を達成しました。

また、レファレンスサービスにも力を入れていて、14人の司書が利用者の相談や要望に応え、年間の受付件数は1万7000件を超えています。

【グラフ】蔵書数と年間貸出冊数の推移



学校図書館と子どもたちの実態

学校図書館は、子どもたちの『学び』の中心地です。しかし、その実態は必ずしも恵まれたものではないようです。ここでは、学校図書館や子どもたちの現状と課題を探ります。

学校図書館とは

学校図書館は、学校に在籍する子どもや教員を利用対象とする学校教育施設で、公立図書館と同じく、本の貸し出しや返却、本や資料の収集・保存、読書会や鑑賞会などの開催といった事務があります。

『司書教諭』の役割

司書教諭は、学校図書館の運営を担当する教員のことで、本の貸し出し・返却や館内整理、購入図書の選定などをするほか、子どもたちに図書館の利用や本の活用方法などを指導します。市では、12学級以上のすべての学校と、12学級未満のほとんどの学校に司書教諭を配置しているほか、すべての学校に図書館事務補助を置いています。

『読書』『学習』の拠点

学校図書館には、いくつかの機能があります。

▽**学習・情報センター**
子どもたちの学習や活動発表などの支援

▽**読書センター**
子どもたちが集い、読書を通じて自己を啓発する場

▽**教材センター**
教員の授業研究や教材製作などの支援（本のレファレンスや取り寄せなど）

学校図書館には、児童書を中心に、読書や学習に役立つ本や資料があります。市内の学校図書館の蔵書数は、1校あたり約7600冊（平成26年3月末時点）で、年間貸出冊数は、子ども1人あたり41・8冊（小学生69・9冊、中学生13・8冊）となっています。

限りある図書購入費

学校図書館には、学校規模に応じた蔵書数の目安（図書標準）がありますが、市内の小・中学校の達成率は、小学校が94・7パーセント、中学校が77・4パーセントとなっています。市の財政状況が厳しく、図書購入費が十分とは言えない状況です。

授業や学級担任を兼任

司書教諭は本来、全校の子どもたちを対象として、子どもが本を探したり、調べたりする時に、助言や指導を行わなければなりません。しかし、ほとんどの学校では、授業や学級担任を兼任しているため、図書館事務補助に図書館運営を任せざるを得ないのが実情です。

成長とともに『読書離れ』

読書の習慣は、子どもに良い影響を与えます。『朝の読書』や『読み語り』によって、子どもの集中力や想像力が養われた事例や、『国際学習到達度調査（PISA）』によると、読書習慣がある子どもほど読解力が高い傾向にあることが報告されています。読書習慣と読解力の関係は、国内でも同じ傾向にあり、秋田県が、中学生の読書率（73・7パーセント）と学力テスト正答率（71・8パーセント）で、いずれも全国1位となっています。

ただし、子どもたちは、年齢を重ねるにつれて読書時間が短くなる『読書離れ』が進むと言われています。市内の子どもたちも同じ傾向にあり、平成26年度『全国学力・学習状況調査』によると、学校の授業時間以外で1日10分以上読書すると答えた小学生が67・1パーセントなのに対し、中学生は56・1パーセントと少なくなっています。

先生から

黒川小学校
図書主任（司書教諭）
吉永 範子 教諭

本に親しむことは、言葉を豊かにし、『夢』をはぐくみます。司書教諭の役割は、子どもたち一人一人に図書指導を行うことです。

しかし、学級担任を兼任していて、日中は学級の子どもたちに付ききりですので、放課後になって図書館事務に取り掛かります。到底、一人でこなすことはできません。私が運営計画の作成や催し物の企画立案、購入図書の選定などを担当し、日常的な事務（貸し出し・返却、館内整理など）は、図書館に常駐する図書館事務補助に任せています。図書館だよりの作成や、図書委員会の指導などは、事務補助と共同して当たっています。

学校図書館を支える 市民図書館の協力のカタチ

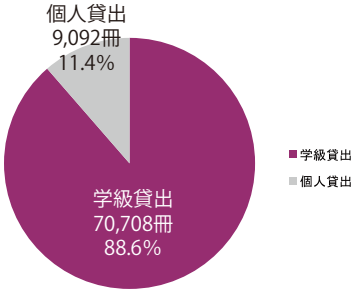
市民図書館は、子どもの読書環境や学習活動を充実させるために、さまざまな分野で学校や子どもたちに協力しています。ここでは、具体的な事例を紹介します。

自動車図書館『ぶっくん』

自動車図書館『ぶっくん』は、市民図書館から遠い地域を中心に、市内の公共施設や医療・介護施設、幼・保育園、小・中学校など、計71か所を月2回程度巡回しています。小学校は16校中14校、中学校は8校中3校を巡回し、大人向けの一般書や雑誌だけでなく、子どもたちが親しみやすい絵本や児童文学などの児童書も積載しています。『ぶっくん』の平成26年度の年間貸出冊数は14万8159冊にのぼり、そのうち小・中学校の貸出冊数は7万9800冊で、全体の53・9パーセントを占めています。

↓学級貸出で、自分たちが選んだ本を借りる子どもたち

【グラフ】学級貸出と個人貸出の割合



学級貸出

学級貸出は、一般的な団体貸出（公立図書館の司書が適切な本を選んで貸し出す方法）ではなく、子どもたちが本を選び、自分たちでコンテナに詰め込んで学級ごとに借りていくものです。学級貸出用の本は、自動車図書館『ぶっくん』で各学校へ運んでいます。【グラフ】に示すように、年間の貸出冊数は、『ぶっくん』を利用する小・中学校全体の貸出冊数（個人利用を含む）の88・6パーセントに当たる7万708冊となっています。この学級貸出により、子どもたちにとって身近に本がある環境が整えられています。

家読『おすすめ本』の紹介

市では、平成19年6月に『家読』をスタートし、家庭や学校で実践しています。この『家読』を進めるために、図書のプロである司書が、子どもたちにぜひ読んでほしいと思う本を選んで、小学生と中学生向けのおすすめ本としてリストアップし、学校に年11回紹介しています。

ブックトーク

ブックトークとは、話し手が聞き手に対して、あるテーマに沿って一定時間内に数冊の本を紹介するものです。主に、公立図書館の司書や学校の司書教諭、図書ボランティアなどが話し手となり、聞き手の子どもたちに対して、本のおもしろさを伝え、読んでみたいという意欲を起こさせるように語ります。読み聞かせや朗読と違って、本を読むだけではありません。市民図書館では、一部の学校を訪問して実施しています。

↓学校関係者が多く来場する児童書展示会

学校司書研修会

教育委員会が主催する市内の小・中学校図書館担当者（事務補助）の研修会の場で、市民図書館の司書が講師となり、学級貸出用カードの作り方と活用方法、利用案内の仕方などを紹介しています。

児童書展示会

学校図書館の本は、子どもたちの読書用や自主学習としてだけでなく、教員の授業研究の資料にも活用されます。市民図書館では、学校の購入図書の選定に参考となるよう、推薦図書を集めた展示会（見本市）を開催しています。九州でも数か所しか開催されておらず、実際に本を手に取って閲覧できるため、学校関係者にとって貴重な機会となっています。

『子ども図書館員』講座

子どもたちに、図書館や本に親しみを持ってもらうため、市内の小学生を対象に、夏休みなどの休業期間を利用して開催しています。講座では、図書館員の仕事やおはなし会を体験するほか、壁新聞づくりや本の帯づくりなどに取り組み、修了時に認定証を交付します。

↑『図書館員』講座で新聞づくりを学ぶ子どもたち

これからも学校図書館のそばに。子どもたちの『笑顔』のために。

子どもたちがもっと本に親しみ、学校図書館が学校の中心的な役割を果たすために、市民図書館に何ができるのでしょうか。今後の展開を考えます。

読書リーダーの養成

市民図書館だけで、子どもたちの読書活動を支えるのは困難です。大切なのは、子ども自身が本のすばらしさを理解し、校内で読書活動に取り組むことです。『読書リーダー』は、周囲の子どもたちに学校図書館の利用方法を徹底させたり、『おすすめ本』を紹介したりするなど、司書の役割の一部を担うことで、読書環境の向上に計り知れない効果をもたらします。

↓子どもたちが自ら読んだ本の魅力を紹介

読書リーダーの養成には、子どもが講義や実習などを修了すれば認定する仕組みを作ることも必要です。子ども自身で自発的に読書活動を推進する環境づくりを応援していきます。

『調べ学習』の支援

子どもたちは、自分でテーマを設定し、学校図書館を利用したり、聞き取りを行ったりして、その結果をまとめる『調べ学習』を実践しています。しかし、むやみに本を探しても、求める情報にはたどり着きません。市民図書館の司書が、調べる順序や本の選び方などを子どもたちに教える機会を提供します。

また、教員向けに講習会を開催します。現在実施されている学校図書館事務担当者の研修会などを通じて、調べ学習の授業に向けた準備や指導の方法などを紹介します。

↑本の帯づくりに取り組む子どもたち

もっと本を好きになってもらうために

読書は、物語に感動したり、知識を広げたりすることだけでなく、感じたことを他人に伝えたり、行動に表したりすることで、人生をより良くする手助けとなります。

近年、『ビブリオバトル』（知的書評合戦）という取り組みが登場しています。数人の発表者が本を紹介し、聞いた人が投票して『チャンプ本』を決めるものです。人に勧めることで、本の良さを深く知ることができる利点があります。

今後も、年齢を問わず、本のすばらしさを知ってもらうために、新たな手法も取り入れながら、本を好きになる環境づくりに取り組みます。

『学ぶ』力が人生を切り開く

市民図書館長　古瀬　義孝

子どもの読書は『心のビタミン』です。市民図書館は、平成14年と26年に、子ども読書実践図書館として文部科学大臣表彰を受けたほか、伊万里市は平成22年に『こども読書のまち』宣言を行いました。

この読書と学習には、密接な関連があることが国際的にも提唱されています。OECD（経済協力開発機構）の学力調査（通称『ピサ・テスト』）では、これまで読書先進国の北欧諸国が上位を占めていました。平成8年、私もデンマークの学校図書館を視察しましたが、公立図書館と学校図書館とはオンラインで結ばれ、学校の真ん中で活発な活動を展開していました。最近では、ICT化と読書教育の両方に力を注ぐ韓国が上位になっています。

しかし、ICTはあくまで手段であって、読書は全人格を形成する大きな役割を果たします。

今、最も必要な教育は、『学ぶ』力を育てることだと考えています。福岡県宇美町の小学校では、8割を超える子どもが、『図書館を使った調べる学習コンクール』に毎年応募しています。自ら学ぶ喜びを身に付けた子どもは、成長しても学び続けます。私たち公立図書館は、子どもたちの未来を開くために、これからも学校図書館の活動をお手伝いしたいと思います。

↑伊万里の『家読』を『街読』に発展させたいと語る古瀬館長